日出町歴史資料館・日出町帆足萬里記念館
令和４年第２回　特集展

詩文に見る日出の景色

2022年7月5日（火）～2022年11月6日（日）

主催　日出町歴史資料館・日出町帆足萬里記念館
日出町教育委員会　社会教育課

Ⅰ景色を読む

漢詩の始まり

最古の漢詩篇は、四書五経の一つ「詩経」で、もとは黄河中下流域を治めていた中原諸国の民衆・朝廷・宗廟祭祀等、口承で伝播していた詩を春秋時代前期に書き留め成書化したと考えられています。収録されている詩は主に、西周時代から春秋時代（紀元前 11 世紀～紀元前 7 世紀）頃のものとされ、概ね 4 言で対句を用いるなどの傾向としてはあるが、一つの詩に 4 言と 5 言の句があるもの、６句構成や仄音による押韻といった詩もみられ、区数や韻律の形式に関して厳密な決まりはまだなかったようです。戦国時代になり、長江中流域（現在の湖北省・湖南省）を中心に治めた楚では、『楚辞』が編纂されます。散文的な詩の他、祝詞の類から発展したと考えられる詩句も収録されており、中原とは異なる特徴を見せる詩が作られていきました。この二つを評する際『詩経』は素朴、『楚辞』は抒情的とされ、特に『楚辞』は「辞賦」という詩と散文の中間的な文体の先駆け的存在となり、後漢時代に大いに影響を与えました。

朱熹『詩経集注』

時代と共に韻律や字句等の整理が行われ、唐時代には 4 句で構成される絶句、8 句で構成される律詩、そして偶数句で構成されたものを排律と呼び、厳格な韻律で作詩されるようになりました。以降この様式が漢詩の規範となり、唐時代以降の漢詩を近体詩と称すようになりまに作られた漢詩を「唐詩」と呼び、いつの時代も漢詩の必修とされました。

乾隆帝『唐宋詩醇』

沈徳潜『唐宋八大家文読本』

漢詩の伝播

漢字が日本に伝播してまもなく、国内でも漢詩が作られるようになりました。751 年に日本最古の漢詩集『懐風藻』が、9 世紀には、『凌雲集』(814 年)、『文華秀麗集』(818 年)、『経国集』（827 年）の 3 つの勅撰集が編纂されます。この時代の漢詩は、僧侶や貴族といったごく一部の人物によってたしなまれる存在でした。平安時代では、特に白居易の漢詩が好まれ、日本漢詩に大きな影響を与えましたが、国風文化の風潮と相まって次第に日本的な作風が織り交ぜられた漢詩へと発展していきます。菅原道真（845 ～ 903）は、この時代を代表する漢詩人で、日本の古典を素地にした漢詩を作り、その後の日本漢詩における基礎を築きました。

-1-

江戸時代の印刷技術の発展と朱子学の普及に伴い漢詩文も民衆の目に触れる機会が増えたことで、漢詩文を作る層も民衆にまで広がりを見せます。それまで唐詩や宋詩の影響を大いに受け続けている日本漢詩ですが、中国の漢詩と比べて抒情性が強いとされています。中国でも抒情的な漢詩が盛んに作られた時期がありましたが、一時的なもので定着はしませんでした。日本漢詩では、平安時代の国風文化の影響も含め、和歌のように自らの心情を織り交ぜて表現することが好まれたようで、唐詩を学ぶ際にもその傾向はあったようです。

大典顕常『唐詩解頤』

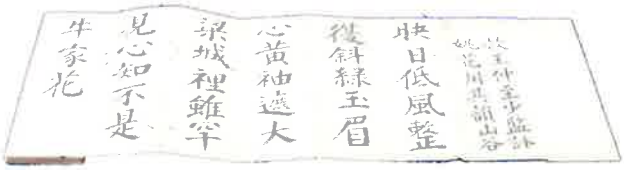
大典顕常『詩語解』

Ⅱ 日出のよみ人

日出に息づく漢文文化

江戸時代の漢詩はどのようにして学ばれたかを知る一つの手がかりとして、藩校での教育が挙げられます。日出藩の藩校であった致道館でも漢籍は学ばれており、『唐詩選』をはじめとする唐宋時代の漢詩が取り扱われていたことが分かっています。しかし、藩校で学んだとされる漢籍の中には『詩経』はありましたが『楚辞』の記載はありません。「致道館本」は、明治維新の際に藩校としての役目を終えた致道館が、その後も建物を転用される中で収集された書籍群の総称ですが、その中にも『楚辞』は含まれていません。このことから『詩経』は、漢詩のとして学ぶ対象ではなく、四書五経の一つとして学ぶべき経典としての認識が強かった可能性があります。

豊後三賢の一人で日出藩の出身である帆足萬里は、「中国古典を理解するうえでも古典を学ぶことは重要である」とし、作文にも注力していたことが『帆足先生文集』でうかがえます。帆足萬里自身も幼いころから漢詩文を作っており、『西崦先生餘稿』には、季節を織り交ぜた漢詩の他に、南端の西崦精舎（萬里の私塾）や、大神の深江等、日出の各地へ赴いた際に作ったとされる漢詩も記されています。帆足萬里をはじめとする文人たちは、他者との交流の中で漢詩を作って相手に贈ることがあり、頻繁に漢詩が作られていました。『竹渓先生遺稿』には、野本白巌、佐野博洋等、萬里の弟子たちの間でも漢詩を送り合っていたことがうかがえる詩が遺されています。



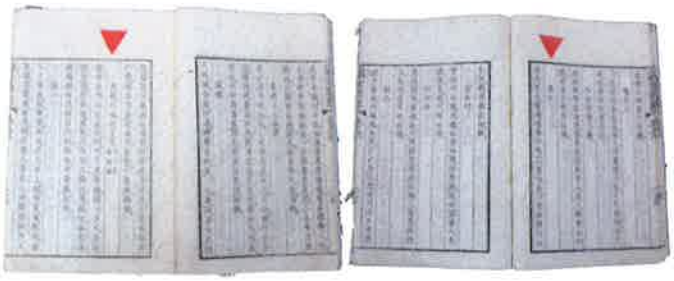
宇都宮逵山『山谷詩帖』

元田直 編『竹渓先生遺稿 全』

中村鼎五 編『栗園詩稾』

松本寿三郎 写『野本先生詩集 全』

岡松甕谷『帆足先生文集』



脇蘭室『蘭室集略』

Ⅱ 日出の景色

日出の景色を切り取る

江戸時代の文人たちは、詩作することが日常的なものであったようで、何気ない日常や風景を漢詩文にしていました。日出の文人たちも同様で、庭から見える景色の他、訪問先や旅先での出来事なども漢詩にしており、当時の空気感を今に伝えるものとなっています。

現在と過去の景色が異なる場合、過去の景色を知る手掛かりとして最もわかりやすいものは視覚情報の写真・絵画が挙げられます。建物の位置や規模等の事実を知るうえでは、文献資料もとても重要です。一方で和歌・漢詩等の詩文は、心情を表すために誇張表現や意図的に情景を配置することもあり、書かれた内容の信憑性については、先述の資料以上に厳しく精査しなければなりません。しかし、「梅」といえば「初春」というように、作者や当時の人が抱いていた印象・象徴性を探る資料として漢詩はとても有用です。

漢詩は風景の描写に焦点を当てた作品が多く、日出は海や山等多彩な風景があり、漢詩を作る上では恵まれた環境にあります。同じ場所でも、四季・天候・時間の違いで受け取る印象が変わるため、多くの漢詩が生み出されました。また自然だけではなく、日出の人々の生活や賑わいに触れた漢詩もあり、漢詩の独特な調子と共に当時の人々の雰囲気を間接的に触れることができるものの一つとなっています。

『日出之景及び春風楼記』

十市王洋『松樹鹿鳴越山』

Ⅳ八景を読む

日出の八景

「八景」は、北宋時代（960 年～ 1127 年）に洞庭湖周辺の瀟湘地方（現在の湖南省）の景色を画題、詩題にした「瀟湘八景」が始まりで、中国では明初期の頃まで盛んに作成されました。日本へ伝播したのは 14 世紀頃とされており、以降、国内でも各地で瀟湘八景になぞらえた景勝地が題材として選定されます。江戸時代に入ると、八景の他に六景や十景といった数の違うもの等、瀟湘八景から離れた題材もあらわれました。

（賛）金玄成『瀟湘八景図』（東京国立博物館所蔵）

瀟湘八景の位置

日出の領内では、3 代藩主木下俊長（1648 ～ 1716）の代に八景詩が詠まれるようになり、儒学者で漢詩人の人見竹洞（1638 ～ 1696）が深江の景観を題材にした八景詩を遺しています。後にこの深江の詩題で帆足萬里も詩作しており、萬里の作品は人見竹洞の漢詩を踏まえた内容となっています。二人の詩は対比され長く日出領内で知られた詩題となっていきました。

日出領内では深江以外にも八景と呼ばれる景観が作られ、川崎の「臨江閣八景」、日出の「縦望亭八景」等が挙げられます。その他に「日出城十景」、山香の「八幡森十二景」といった八景以外の詩作もあります。選定には、歴代の日出藩主が関係しているものもあることから、日出領内の人が詩作し楽しむだけでなく、日出の代表的な名勝地として選定されていたのかもしれません。

『大神村図跡考』

『西崦先生餘稿』

日出町歴史資料館・日出町帆足萬里記念館
【開館時間】9：00 ～ 17：00　※入館は 16：30 まで
【休館日】月曜日（祝日の場合はその翌日）
年末年始（12 月 29 日～ 1 月 3 日）
【住　所】大分県速見郡日出町 2602 番地 1
TEL0977-72-6100　FAX0977-72-6103

■所管課　日出町教育委員会
社会教育課（文化財係）
〒879-1506 大分県速見郡日出町 3891 番地 2
TEL0977-73-3222　FAX0977-72-8680